

副長は銀狼の義弟 《改訂中》

紫蒼慧悟

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

俺はクラスメイトに好きな人がいる。

ああ、LIKEではなくLOVEだ!!

毎日毎日告白してるのに未だに返事をもらえない。

しかも：今年は末世が起こるらしいし：

親友のバカが告りに行くから手伝えってうるせえし：

喜美は頭おかしいし：

ネイトは可愛いし：

商人夫婦は守銭奴だし：

眼鏡は厨二病だし…

ネイト可愛すぎてヤバイし…

智は股間ばっかし狙撃してくるし…

正純はスベるし…

ネイト見るとムラムラするし…

ネンジはネバっとしてるし…

イトケンは淫靡だし…

ネイトマジ天使！

御広敷はロリコンだし…

アデーレはペタンコだし…

ネイトは（ry

点蔵は犬臭いし…

ウルキアガは姉狂いだし…

ネイト（ピーーーーー）だし…

ナルゼとナイトは百合百合だし…

ハッサンはカレーだし…

ネイトhshs

担任は肉食アマゾネスだし：

学長はエロゲばっかやってて仕事しねえし、

そのしわ寄せがなんで俺に来るの!?

マトモなのって俺とノリキと鈴さんとペルソナ君とマサしかいないじゃんかよー

はあ：：ネイト、心の底から愛してるよ

俺達家族だけど大丈夫だよね？

「色々と危ないと判断できません——以上」

武蔵さん：：俺の恋路に不穏な言葉を投げつけないでください：

こんな問題だらけの物語。

副長に春は訪れるのか!?

※この作品は t i n a m i でも公開しています。

# 目次

#03	#02	#01	三河編	#00
38	22	7		1



## #00

「俺は王様になる!」

目の前にいる最上級のバカがそう言った。

「……そっか、頑張れよ」

俺はそのこと自体に興味がなかった。

いや…興味がないというのは嘘だ。すまん。

正確にはこれだけじゃダメなんだよ…分かってんだろ、親友?

まあ…バカが王様になろうと俺には関係ない。

手伝えとか行ってくるならまだしも、俺に宣言したところでどうにかなるわけではない。

「おいおいおい!?!相変わらずクールだな、親友!?!」

俺はそうゆうところは嫌いじゃねえぜ!?!」

馬鹿はこちらに笑いながら親指を突き立てている。

「修道ならテンゾーかウルキアガとやれ。」

だから、冗談とわかっていても無表情で突き放つ。

「んー、俺は一人じゃなんにもできねえからな。」

だから、無理にとは言わねえからさあ…手伝つてくんね?」

バカが微笑しながら聞いてくる。

「手伝うことについては別にいいけどよ…何のために王様になるんだ?」

問題はそこだ。

「ホライゾンのためだよ…」

「あいつは死んじまつたんだぞ?」

正直言えば驚愕した。

喜美が何とかしたとはいえ、ホライゾンが死んでからまだそんなに経っていないこの状況で覚悟を決めたのか…

「ああ。わかってる…まだ、あの道は通れねえし、覚悟も何もかもが足んねえけど…これだけは譲れねえんだよ…」

覚悟が足りない…?

だからコイツは馬鹿なんだよ…

覚悟の決まった目でそんなこと言ってるんじやねえよ…

…そんなこと言われたらお前を王にしたくなつちまうじやねえか!!

「どんな王になる気だよ?」



あくあ……言っちゃまったよ…

これで俺の将来はコイツのために戦争するしかなくなっちゃまったよ…

「みんなの夢が叶う国を作る王様だ!!」

馬鹿はあの時と同じことを言ってる

「だったら…総長兼生徒会長にならねえとな？」

「おう！そしたら親友は副長になってくれよ!!」

「いいぜ。じゃあ、約束な？」

昔から馬鹿とする約束…

俺は右手を握って馬鹿の前に突き出す。

馬鹿も微笑を浮かべながら右手を突き出す。

コツンと。

互いの拳を軽くぶつける。

「おう。約束な！」

馬鹿はいつも通りの笑顔でそう言った。



あれから約十年…

馬鹿は約束通りに総長兼生徒会長に…

俺も副長になった。

「そろそろ終わりにするか…」

目の前にいる昔から変わらない馬鹿がそう呟く。

”奥多摩”の艦首側からは昔から知ってるアノ歌が聞こえてくる。

今、俺と馬鹿がいるのは”奥多摩”の艦尾側にある教導院前の橋の上だ。

「まあ……頑張れよ、トリー」

「おう…ストーカー紛いのことをして約一年!!俺はやるぜ、親友」

”総長兼生徒会長 葵・トリー”という腕章をしているのは昔から変わらない馬鹿で

あり、俺の親友だ。

対する俺は”副長 ロアル・ミトツダイラ”という腕章をしている。

「捕まれよ、親友。いや、現行犯じゃないと無理なんだったか…

くっそ…本気で残念だ!!」

俺の言葉に馬鹿が反応する。

「おいおいおい!!親友は相変わらず容赦ねえな!!」

でもよお…あの子全然ホライゾンじゃなかったんだよ…」

「そりゃあ、よかつたじゃねえか。」

もしあの自動人形がホライゾンならお前近づけなかったら?」

俺は笑いながら馬鹿に聞く。

馬鹿も昔から変わらない微笑を浮かべながら、ああ。と言つてから、

「あの子がホライゾンだったら俺には近づく資格もなかったけど、

今は…傍にいてくれるだけでもいいかなあつて思つてんだ…」

「じゃあ、明日はお前の失恋祝いな?」

「おいおい、親友!!最初から諦めてたら何も上手いかないんだぜ!?

こないだ点蔵から借りたエロゲでヒロインが言つてた!!」

「厨二眼鏡が好きそうな言葉だな…」

なんか話が逸れてるから戻す。

「告るんだな?」

「ああ。明日、告つてくる…」

でも、その前にエロゲ卒業のためにエロゲ買つてくる!!」

「おお、行つてこい!!俺も学長のサポートした分の仕事を終わらせないといけねえからな…」

あの人は最近サボりすぎだ…

「なんだよ、学長先生サボりかよ…こないだ貸したエロゲ返してもらおうと思ってたんだけど…」

「ああ、後でエロゲ買ってこいって言ってたのはお前が原因か…」  
取り敢えず殴る。

校舎の壁を突き破って馬鹿が吹っ飛ぶ。

俺は”奥多摩”の艦首側に視線を合わせるが、もう既に歌は聞こえてこなかった。

そういうえば、母さんから連絡来てたな…後でいいか。

アレ？　そういうや、最近学長のフォローしかしてない気がする…

……ま、いつか。

母さんとネイトの発言のあれそれとかよりはだいたいぶ楽だな…

## 三河編

## #01

空を行く船がある。

その船は八つの船から構成される巨大な船だった。

左右に三つ、真ん中に二つの船が川の字で構成された巨大な船

” 準バハムート級航空都市艦・武蔵 ”

その大きさはおよそ8 km。

その巨体が空に浮かび、艦首側から空に波を作り進んでいく。

武蔵の中央後艦” 奥多摩 ” の艦尾側に一つの建物がある。

” 武蔵アリアダスト教導院 ”

校舎の入口は2階にあり、そこへ行くために橋が架かっている。  
時間は、午前8時40分：

「よし、三年梅組集合ー。」

橋の上から女性の声がする。

黒の軽装甲型ジャージを着た長剣を背負った女性、

女性の前には複数の人影がある。

黒と白の制服を着た若者たちだ。

人の姿もあれば人ではない者もいる。

そんな彼らに彼女が声をかける。

「これより、体育の授業をはじめます」

女性は教師だった。

”オリオトライ・真喜子”

それが女教師の名前だ。

「先生、これから品川の先にあるヤクザの事務所まで、ちよつとヤクザ殴りに全速力で走っていくから、全員ついてくるように。」

そつから先は実技ね。遅れたら早朝の教室掃除よ。

——はい、返事は？」

「Jud。」  
ジャッジメン  
ト

女教師の説明に生徒である彼らは了解の意思を伝える。

そこへ女教師へ疑問をぶつける為、手を挙げたのは”会計 シロジロ・ベルトーニ”

という腕章をつけた長身の男子だ。

「教師オリオトライ、体育とチンピラとどのような関係が？金ですか？」

シロジロの疑問に答えたのは女教師ではなく彼の隣にいた。会計補佐 ハイデイ・オーゲザヴァラー」という腕章をつけたロングヘアの女子だった。

「ほらシロ君、先生、最近地上げにあつて最下層行きになつて暴れて壁割つて教員課にマジ叱られたから」

「中盤以降は全部自分のせいのようにだが：報復ですか、教師オリオトライ？」

「報復じゃないわよ。ただ単に腹が立つたんで仕返すだけだから」

女教師は手を振つて違うというが十人中十人が報復という行為には違いがなかった。

「ほーふく、ほーふく。うん、ほーふく。」

黒の翼と金の翼をそれぞれ持った少女二人が女教師に言うが、女教師は長剣を二人に向けて黙らせる。

「休んでるの、誰かいる？ミリアム・ポークウと東は来てないとしてー」

女教師の問いに答えたのは、第三特務 マルゴット・ナイト」という腕章をつけた先程の金翼の少女だった。

「ナイちゃんが見る限り、セージュンとソーチョー、後フクチョーがいないかなあ」

「正純は小等部の講師のバイトで、午後から酒井学長を送りに行くから今日は自由出席

の筈」

マルゴットの声に彼女の腕を抱いている黒翼の少女。第三特務 マルガ・ナルゼが補足説明を加える。

「んー、じゃあ…トリーとロアルについて知ってる人いない？」

女教師の声に反応するのは一人の少女、茶色いウェーブヘアの少女、”葵・喜美”だ。「フフ、皆、うちの愚弟のトリーと愚狼のロアルのことがそんなに聞きたい？聞きたいわよね？」

だって武蔵の総長兼生徒会長と副長の動向だものね。フフ。——でも教えないわ!!」  
喜美の発言に、皆が、ええっ!?!と疑問の声を作る。

その声に反応して彼女は頷き、

「だって今朝8時過ぎにこのベルフロレ・葵が起きたらもういなくなっちゃったから。」

しかしあの愚弟、人の朝食作っていかずに朝から早起きとは…地獄に落ちるがいいわ!

因みに愚狼は今日はまだみてないわ!」

彼女の声に反応したのはマルゴットだった。

「あの一、喜美ちゃん?また芸名変えたの?」

「そうよマルゴット!私のことはベルフロレって呼ぶの!いい!」



喜美はマルゴットの襟首を掴んでガクガクと揺さぶっている。

「三日前はジョゼフィーヌじゃなかったかなー?」

「あれは三軒隣の中村さんが、飼い犬に同じ名前を付けたから無しよ!!いいい!!」  
マルゴットと喜美のやり取りを見つつ女教師は一人の少女に質問する。

「じゃあ、ミトツダイラ、ロアルについてなにか知らない?」

「な、なんで私なんですの!?!」

声を上げたのは、ポリウムある銀の巻き髪をした少女だ。

”第五特務 ネイト・ミトツダイラ”という腕章が彼女の左腕に付いている。

ネイトの声に皆は一度顔を見合わせてから、またまた!という顔をする。

皆を代表するように声を上げるのは喜美だ。

「なんでって…ミトツダイラ、あんた愚狼と仲いいじゃないの!」

「べ、別にそれは姉弟として仲良くしてるだけですのよ!?

そ、それに彼は副長でもあるのですから、特務として友好関係を結ぶのは悪いこと  
じゃ…って、なんなんですか、その顔はー!?!」

皆のニヤニヤした顔にまたもや叫び声をあげる。

女教師はいつの間にか出した出席簿にチェックを入れていく。

「じゃ、トリーとロアルは無断遅刻かな?ま、聖連の暫定支配下にある極東・武蔵の総長

と副長はこれくらいじゃなきやね」

女教師の声に生徒達は耳を傾ける。

「歴史再現の名の下に、各国の代表が教導院の学生に姿を変え、極東を分割支配している今、

極東の代表には聖連の支配に都合のいい人物：葵・トリー」

「あいつみたいは無能が選ばれる…」（不可能男—インポツシブル）”なんて（字名—アーバンネーム）まで与えられてな…」

女教師の声に続いた声は上から聞こえる。

「遅刻よ、ロアル！」

女教師が3階の教室から顔を出している赤髪の少年、ロアルに向けて言う。

「先生、悪いけど学長のサボりの後始末で3時間目ぐらいから出るわー」

「あの人またサボりかよ!？」

ロアルの言葉にツツコミを入れるのは教師ではなく生徒だ。

「ロアル!!遅刻するならせめて知らせてから行きなさい!」

「あ!!ネイトー、愛してる!!」

「話が噛み合ってませんのよー!？」

ネイトの声にロアルは窓から身を乗り出しながらこたえ、ネイトがまたもや叫ぶ。

「フフ。愚狼、愚弟は一緒じゃないの?」

「トリー?……知らねえけど?」

喜美の問いかけに答えたあと校舎のある場所を見る。

そこには穴が空いていた……人の形をした穴だった。

皆がその穴を見て大体の事情を把握したのは言うまでもなかった。

「もう160年もこれだからなあ……」

話を戻すためにロアルがそう言うのと、

「本来この神州の大地は全て僕達極東の物なのに……」

ずつと頭下げたり協力したり金払ったりで、この武蔵は極東の中心になろうにも移動

ばっかりの権力骨抜きでどうしようもない。」

言葉を引き継いだのは、書記　ネシンバラ・トゥーサン” という腕章をつけた眼鏡の

少年だった。

彼は一つ息をついて、また語りだす。

「なにしろ各国の学生は上限年齢が無制限なのに、こっちは十八歳で卒業、——それを超

えたら政治も軍事も出来ないんだから」

ネシンバラの言葉に反応したのは、御広敷” という名札の袋菓子をお口にしている丸

い少年だ。

「小生、あまりそういうこと言っていると危険ではないかと——」

「もうすぐ三河だ。あの”武神”共もいちいち録音したりしてる暇はねえよ」

ロアルがそう言うのと女教師が笑って、

「大人ぶって……でもまあ、そんなかんじで面倒で押さえ込まれたこの国だけ……君らこれからどうしたいか、わかってる？」

腰を軽く低くした女教師に対し、生徒達は表情を硬くし、一部の者達は瞬間的に反応する。

上からは、頑張れよーという声があるがその声には皆は反応せず、目の前の女教師に注目している。

「いいねえ、戦闘系技能を持つてるなら、今ので”来”ないとね。ルールは簡単、事務所にたどり着くまでに先生に攻撃を当てるのが出来たら——」

出席点を五点プラス。意味解る？——五回サボれるの!」

女教師の言葉に手を挙げて質問する者がいる。

”第一特務 点蔵・クロスユナイト”という腕章をした帽子の少年だ。

「先生、攻撃を”通す”ではなく”当てる”でいいのでござるな?」

「戦闘系は細かいわねー。それでいいわよ? 手段も構わないわ」

女教師の言葉に、点蔵は指をワキワキさせながら、

「では、先生のパーツでどこか触ったり揉んだりしたら減点されるとこありますか？」  
点蔵の言葉に続くのは、第二特務 キヨナリ・ウルキアガ」という腕章をつけた青と白の航空系半竜だ。

「または逆にボーナスポイント出るようなことか」

「あはは。授業始まる前に死にたい？」

「ひいひい！」

女教師の言葉に二人は怯える。

「んじゃ、授業開始よ」

女教師は一步下がってそのまま後方に跳躍する。

その姿に生徒達は一瞬思考が停止してしまった。

「遅いわよ!!」

女教師の言葉に気づき、

「追え!!」

誰かが言った言葉で皆が走り出す。



「書類仕事も終わったし、俺も行くか……」

誰に言うでもなくロアルは呟き、立ち上がる。

「ん？これは——」

視界に入ったのは一枚の紙。

親友であるトーリが総長兼生徒会長になった際に、書いた紙だった。

《武蔵アリアダスト教導院：学生代表内訳》

『総長連合』

・ 総長           ： 葵・トーリ

・ 副長           ： ロアル・ミトツダイラ

・ 第一特務（諜報）： 点蔵・クロスユナイト

・ 第二特務（裁判）： キヨナリ・ウルキアガ

・ 第三特務（実働）： マルゴット・ナイト

・ 第四特務（実働）： マルガ・ナルゼ

・ 第五特務（実働）： ネイト・ミトツダイラ

・ 第六特務（実働）： 直政

## 『生徒会』

- ・会長                   ：葵・トリー
- ・副会長               ：本多・正純
- ・会計                   ：シロジロ・ベルトーニ
- ・会計補佐：ハイデイ・オーゲザヴァラー
- ・書記                   ：ネシンバラ・トゥーサン

「そーいやあ、これ書いたときはまさか全員承諾するとは思わなかったなあ……」

トリーの馬鹿が、こうなったら最高じゃね!?!とか言ってたが、まさか本当にこうなるとは思わなかった……

「おっと、買い物行つて学長に届けて授業か……」

その前に腹ごしらえするか……」

校舎を出て”多摩”の方を見ると煙が上がっていた。

飯は後だなあ……

「あ、ハッサンとアデーレが吹っ飛んだ……」

取り敢えず、巻き込まれると”アレ”なので”武蔵野”を経由して”品川”で目的のエロゲを購入して帰ろう。

「そう決めて歩きながら、」多摩で行われている授業という名の鬼ごっこを見物するが、

「あ、ネンジが飛び散った…」

喜美のやつ…

まあ、ネンジなら大丈夫だろ…どうせ、ガード体制を取っていた！とか、隣にいるイトケンに語りかけてることだろう。

さて、俺も急ぎますか…

そう思っただけで走ろうとしたが、遠目に一人の男が見えた。

あの後ろ姿は…学長？

そう、俺にいつも面倒事を押し付けてくるバカだ。

「うおっらああああああああ!!!」

取り敢えず、日頃の鬱憤とストレスを乗せた挨拶変わりのドロップキックをやるが、

「おいおい、ロアル。おじさん相手にそれは洒落にならんぞ?」

余裕で躲しといて何をほざいてやがる!!

「それよりお前さんは授業に参加しないのか?」

「あなたのサボリの尻拭いと買い出しで参加してないの知ってて言ってる?」

「またサボリですか、酒井学長。相変わらずぐうたらしているんですね。——以上」



俺の言葉に武蔵さんが辛辣な台詞を学長に対して浴びせるが、全然気にしていないんだよなあ、この人：

「お！近接攻撃系の出番だな！」

学長は「多摩」の艦首側、企業区画で女教師に仕掛ける者がいた、点蔵だ。

「ここに来るのは君だと思ってたわ！」

「(戦種—スタイル)、(近接忍術師—ニンジャフオーサー)、点蔵——参る!!」

俺と学長と「武蔵」の三人で企業区画で起こった戦闘を見ているが：

「叫ぶ忍者つてのも面白いなあ」

「直ぐに見つかって、「何奴!? 出会え!! 出会え!!」ってやられるのがオチだと思うがな

…」

女教師対絶叫忍者の対決になると思ったが、点蔵がいきなりブレーキをかけた。

「行くでござるよ、ウツキー殿！」

「応!!」

空から女教師に落下していくのはウルキアガだ。

「ありや? これはダメかねえ」

「ロアル、買い物に「ぬるはちっ!」も追加しといて」

「それ、トリーがエロゲ卒業のために買うって言ってたから後で借りろよ

とゆうか…アレは清・武田の総長兼生徒会長じゃねえかよ…

学長ロリコンだっけ？」

「俺も欲しいから買つといて」

「学長名義で買つとく」

後、スルーしてんじゃねえよ！」

「俺の評判が落ちるからロアル名義で頼むわ」

「あんたは本当に最低だな…」

「ロアル様、同情いたします——以上」

「同情するぐらいならこのアホをどうにかしてくれよ、武蔵さん」

俺達の視線の先には女教師が点蔵、ウルキアガ、ノリキの3人をいなして艦首側に跳躍するところだった。

「後はお頼み申す、浅間殿——!!」

点蔵の声に反応して後方に居た黒髪の少女、”浅間・智”が弓を取り出す。

「おっ！梅組の最終秘密兵器の定番だな…」

じゃ、学長…俺はそろそろいくぜ？」

「おお。あ、そうだ

なんか殿先生がお前に用があるらしくてさ、三河に着いたら俺と一緒に降りることに

なつてんだけど……」

学長の言葉に手を振って承諾しておく。

三河か……

いろいろと嫌な噂が流れてるから行きたくないんだけどなあ……

ま、なんとかなるだろ……

牽引帯を渡って俺は”品川”へ向かう。

「……………末世、か……」

今年で世界が終わる……

こんな時にあの馬鹿が告白か……

世の中捨てたもんじゃないなあ……

## # 0 2

右舷一番艦”品川”

貨物艦であるために他国から仕入れた外来品等を扱っている店が多く存在しており、市場街まである。

その店の一つに列が出来ている。

男の列だ。

一番前に並んでいるのは白と黒の長ラン型制服に身を包んだ少年だ。

「さて、今日はアレを買ってから掘り出し物でも探すかなあ……」

そんなことを呟くが人々の喧騒に飲まれて誰にも聞こえていない。

「あれ、トリー君？君もエロゲーを買いに来たのかい？」

少年に話しかけてきたのは……神主だった。

「ん？あ！なんだ、浅間の父ちゃんじゃねえか!!こんなところで何やってんだよ？」

「僕もまだまだ若いからね！人妻巫女モノの新作が出るといいう情報を逃してはいないよ

!!」

神主の言葉に並んでいた男達が反応する。

「え!? 総長!？」

「なんだよ、やっぱりいたのか…」

「げ!?! 総長がいるとエロゲの値段が跳ね上がるんだよなあ…」

等等…

尊敬されているのか敬遠されているのかわからない言葉が次々と出てくるが、皆が笑っていることには違いがなかった。

そうこうしているうちに開店時間になり、男衆が店の中に雪崩込む。

品川にロアルが着くと、すれ違うように1人の忍者が浅草に向けて忍者走りで駆けていくところだった。

「アレって…点蔵の親父さんか?」

ロアルが後ろに振り返って見てみるが、既に忍者の姿はなかった。

「まあいいや」

既にロアルは目的の場所へと歩を進めていた。

目的の店は直ぐに見つかった。

牽引帯のすぐ近くに店を構えていたのもあるが、店を取り囲むような形で行列が出来

ているからだ。

男の行列だ。

いや、正確に言えば男の群れだ。

「ナルゼが見たらネタにしそうな光景だな。」

ロアルはそう呟いて店へと足を向ける。

「ん？げっ?!副長?!」

「な、何イイイ!!」

ひとりがロアルに気づき、悲鳴じみた声を上げる。

その声に反応してか、男の群れがモーゼの十戒のように割れてレジまでの道を作る。

「別に騒動を起こしてなければ、鎮圧したりはしないぞ？」

……起こしてないよなあ？」

「もももももちろん!!」

ロアルのため息混じりの質問に男衆は冷や汗を流しながら答える。

彼らは口が裂けても言えない。

総長のノリにノツてしまつて、女の子をこの店（エロゲショップ）に入れて恥ずかしかる顔を見ようとしていたなどと…

前回はそのせいでココとは別の店がロアルの手によつて物理的に潰れてしまつてい

るのである。

よつて、エロゲ信者にとつてはロアルは天敵とも言える存在になっている。

今回も誰かが番屋に通報したのではないかと内心ビクビクしている。

「お？なんだよ親友、お嬢様系のゲームは新規入荷はねえぞ？」

「んなことは知つてるよ。今回は学長の分だ。」

…つたく、なんで俺が人妻物を買わなきゃいけないんだよ」

「あれ？ロアル君じゃないか」

店内に入りレジにいる店主にメモを渡す。

それだけで店主が商品を用意してくれるが、これは店主に気に入られた人しか出来ない。  
い。

文句を言いつつ店内にいたトリーに愚痴つてみると、横から話しかけてくる人物が来る。

「智。パパじゃねえか。」

また、巫女物かよ、懲りねえな…智に見つかからないようにしてくれよ？

なんでか知らねえけど俺に愚痴ってくるんだよ」

ロアルのクラスメートにしてトリーの幼馴染である、浅間・智の父親である。

手には既に購入済みの「R—元服」のパッケージが見える。

「わかってるよ。」

「じゃあ、僕はこれで帰るよ。仕事もあるしね。」

浅間父はそう言つて店から出ていく。

「あの人浅間神社の最高責任者じゃなかったか？」

ロアルの疑問に答える人間はこの場にはいなかった。

右舷二番艦”多摩”

表層部にある建物の屋根を艦首の方角へ走る教師の後ろから既に梅組の後続集団は動きを見せていた。

”浅間・智”という名札の黒髪巨乳の少女だ。

点蔵の声が掛かる前から、既にどうやって前にいる教師に攻撃を当てるかを思案していた。

方法が決まったのと、点蔵から声がかかるのは同時だった。

「浅間は自身愛用の弓”片梅”を取り出す。」

だが、ここで一つ問題がある。



浅間は走りながら弓を打てないということ。

正確には出来なくはないが、確実性に欠けるということ。

そんな中後方集団の中からネシンバラの声が届く。

「ペルソナ君、足場をお願い！」

その声に答えたのは、バケツヘルムに上半身裸の大男だった。

彼は既に左肩に梅組の良心と言われる少女を抱えながら、速度を上げて浅間に追いつく。

右腕を伸ばして浅間の足場になるようにする。

浅間も速度を緩めてペルソナ君の右肩に乗る。

「地脈接続」

浅間の左目の義眼が光る。

「どう見ても教師というよりリアルアマゾネス。」

——行きます！浅間神社経由で神奏術の術式を使用しますよ!!」

浅間は片梅に矢を番え、構える

そして、浅間の声に呼応するかのよう<sup>マッス</sup>に制服の右襟が開き、彼女の走狗が出る。

『接続：浅間神社・走狗：サクヤ型01：——確認』

『浅間神社に接続しました。修祓・奏上・神楽、走狗にて完遂』

『浅間・智 様、御利用有り難う御座います。加護の選択をどうぞ』

赤い鳥居型の表示<sup>サインプレート</sup>が3つ出た。

「浅間の神音借りを代演奉納で用います！」

ハナミ、——射撃物の停滞と外逸と障害の三種祓いに照準添付の合計四術式を通神祈願で！」

ハナミというのは先程浅間の襟から出てきた走狗の名前だ。

ハナミは浅間の周りを眠そうな顔で周り、

『神音術式 四つ だから 代演 四つ いける？』

浅間にそう問いかける。

「代演として昼食と夕食に五穀を奉納！その後二時間の神楽舞いとハナミとお散歩＋お話し！」

OKだったら加護頂戴」

術式。

浅間の使うソレは極東メジャーの神道、神奏術。

簡単に言えば、”流体”を制御するための術だ。

『うん 許可出たよ 拍手』

ハナミの拍手と同時に浅間の構えた矢は強い輝きを放つ。

「義眼、木葉——会いました！」

女教師をロツクオンしたのを確認して、すぐさま射る。

「行って!!」

光線が離れたように浅間の弓から屋が放たれる。

放たれた矢は一直線に女教師へと飛んでいく。

女教師は跳躍している。

つまりは回避行動ができない。

跳躍中の女教師がとった行動は、矢を切り捨てるという動きだ。

術式のかかかっていない矢ならそれでよかったのだろう。

女教師は長剣を首元に構え、鞘から僅かに刀身を覗かせる。

「無理です！回避性能も添付済みですから回り込みます!!」

浅間の言うとおりに女教師の斬り払いを矢が避けてそのまま女教師を追尾する。

女教師は次の手段として長剣を障壁のように盾にするが、それすら避けて女教師を矢

が狙う。

教師を撃墜したから今日はちらし寿司ですね!!食後にはアイスよ!!

浅間のその妄想は打ち砕かれた。

命中した。

「…やったか!？」

みんなの声に反応したのは浅間だ。

「違います!!手応えが軽い!?!そんなどうして!?!——食後のアイスが!!」

浅間の少し違う落ち込みにハナミがフォローしているが疑問が頭の中を駆け巡る。

その回答をしてくれるのは後ろから走ってくるネシンバラだ。

「髪だ」

ネシンバラの手には数本の女教師と同じ髪色の髪があった。

先程宙にあったソレを掴んだのだ。

「さつき刀身を覗かせた時に髪を切ってチャフがわりにしたんだ。」

ネシンバラの説明に浅間はなっとくした。

確かにそれなら髪を本人と判断して術は効果を失う。

「でも二年の時は髪を切らせることもできなかった。」

それはつまり、成長しているということ。

ネシンバラの後ろから速度を上げてきたナイトが槍投げの要領で先程拾ったアデー

レの槍を女教師に

向けて投げる。

だが、いとも簡単に避けられてしまい、槍は“品川”方面に飛んでいってしまう。

授業は実技に移行していた。

”品川”の艦首側にあるヤクザの事務所。

その前で梅組の良心以外が倒れ伏していた。

そして、女教師の背後には四本腕の魔神族だ。

既に倒れており、講義通りに魔神族を倒せというのが今回の実技だ。

「あんな曲芸できるかあ!!」

生徒たちの叫び声が響くが、女教師は涼しい顔をしている。

事務所は警戒して扉を閉めて鍵までかけている。

それもそうだ。

魔神族というのは体内に流体炉に近いものを持っているばかりか、

装甲も厚く軽量級武神とサシでやり会える存在だ。

それをものの数秒で倒す相手を警戒しない方こそおかしいのだ。

どうしようか。と、女教師が韓げていると生徒たちのさらに後ろから二人の人物が来る。

「あれ？ おいおいおいおい、皆、何やってんだよ？」

「授業に決まってるんだろ」

一人は極東式の長ラン型制服に袖を通した茶髪の少年。

もう一人は袖無しの長ラン型制服に袖を通し、

その上から炎のように紅い着物を肩に羽織っている赤髪の少年。

二人の少年の名を見物していた住民が言う。

「トリー」 インボツシフル 不可能男葵……！」

「ロアル」 フラン・ルウ 炎狼”ミトツダイラ……！」

武蔵アリアダスト教導院の総長兼生徒会長と副長の二人だ。

トリーは軽食屋で買ったパンを頬張り脇には袋に入った何かを抱えている。

それに対してロアルは手ぶらで制服のポケットに手をつ突っ込んでいる。

「うん。俺俺。ってなんだよ、皆。俺、葵・トリーはここに居るぜ？」

トリーは笑みの顔を崩さず、皆の前に行く。

ロアルは溜息をついてからネイトのすぐ隣に座り込む。

トリーの馬鹿発言を尻目にミトツダイラ姉弟は話し込む。

「書類が終わったから授業にきたって感じではなさそうですね？」

「ああ。学長から買い出し頼まれてたからソレを済ませただけ。」

教導院に戻つたらまた雑務だよ。」

馬鹿の発言が真面目なものに変わった。

「あのさ、皆、ちよつと聞いてくれ。前々から言つてたと思うんだけどさ。」

俺、明日告ろうと思うんだ。」

「え？」

殆どがこの反応だった。

別の反応を示したのはロアルだった。

「という訳で、お前等。明日は馬鹿の失恋パーティーだ。」

盛大に虐めてやろうぜ!!」

ロアルの発言にまたもや、

「え!？」

という反応が帰ってくる。

「おいおい、親友。未来は誰にもわからないんだぜ!?!もしかしたら成功するかもしれないな

いだろ?。」

「発言が後ろ向きだよ!!」

皆からのツツコミを愛想笑いで躲す。

そして、いち早く復帰したのはトリーの姉の喜美だ。

「フッフ愚弟。いきなり出てきて酷吏予告とは。エロゲの包み持つてる人間のセリフじゃないわね。

告る相手が画面の向こうにいるなら、コンセントに〇〇〇突っ込んで痺れ死ぬといいわ！素敵！」

喜美の狂人発言にロアルの隣にいるネイトが顔を赤くして驚く。

「おいおい、姉ちゃん。何一人でおいしい空気吸ってんだよ。これはエロゲ卒業のために買ってきた

んだぜ？」

葵姉弟はもうダメだろうと誰もが思ったが誰も口に出さなかった。

優しさではない。今更だからだ。

「じゃあ、愚弟。相手の名前をこの賢姉にゲロしなさい。さあ!!」

なおも会話は続く。聞きたくないと思いつつも相手が気になるのか誰も会話を止めない。

「馬つ鹿！皆、知ってるだろ。——ホライゾンだよ」

相手の名前に皆が絶句する。



「馬鹿ね。十年前にあの子は亡くなったじやない。アンタの嫌いな後悔通りで。」  
肩を落としてトリーにいう喜美は普段と違って寂しそうな声だった。

「わかつてるよ。ただ、そのことからもう逃げねえ。」

トリーは皆を見て口を開く。

「告つた後はきつと皆に迷惑かける。俺、何もできねえしな。それに、その後やろうとしているのは世界に喧嘩売るようなことだしな。」

皆、誰ひとりとして何も言えなかった。

「明日で十年目なんだ。だから、明日告つてくる。この一年いろいろ見て考えてそれは別で好きってわかったから…」

だから——もう、逃げねえ」

トリーの言葉のあとに続いたのはロアルだった。

「やめとけ。傷口が増えるだけだぞ？」

——点蔵みたいに…」

「おいおい、親友。不吉なこと言うなよ！不安になつてくるじゃねえか!!」

「なんで、自分にまで飛び火したんでござるか!？」

約二名が騒ぎ出すがロアルは無視を決め込む。

と、その時トリーの肩を叩く人物がいた。

トーリに旨を揉まれた女教師、オリオトライだ。

「先生！今の聞いてたかよ!?俺の恥ずかしい話!!」

トーリ以外の皆は自分に被害が来ないように距離を取る。

「ん?人間って怒りが頂点に達すると周りの音が聞こえなくなるんだ」

オリオトライの声には怒りの色が見え隠れしていた。

怒りが凄くて隠そうとしても隠れない。そんな感じの声だった。

トーリはもう一度オリオトライに説明する。

オリオトライの表情にも気づかず：

「いいか?...今日が終わって明日になったら俺、告りに行くんだ。」

「よっしゃあ!!死亡フラグゲットおおおおお!!」

オリオトライの回し蹴りがトーリに叩き込まれ、トーリはそのまま事務所の壁をプチ抜き、

事務所の奥にある倉庫にぶち当たり、人形の凹みを作る。

「あくあ。俺、しくらね」

ロアルの発言に皆が首を傾げるがそれはすぐに分かることになった。

事務所から魔神族が出てきたからだ。

それも2体。

「ロアル。遅刻した罰よ。アンタがやりなさい。」

オリオトライの発言に皆が「え!?!」という反応を見せるが、  
「もう終わってるよ…」

ロアルがそう言うのと倒れた魔神族が一つから三つに増えていた。

もうすぐ、三河…

この地から運命は始まる…

## #03

体育の授業が終了した梅組メンバーは教導院の教室に戻ってきていた。

授業開始時とは違いメンバーが増えているが、ソレはいつものことなので気にしている者は誰一人いない。

だが、その中に副長の姿だけが見えなかった。

とはいえ、そのことを気にする者はいない。

”いつものこと”

その一言で片付けられてしまうのがこの”武蔵”の特徴の一つと言えるだろう。

責任の押し付け合いなどは日常茶飯事であるこの”武蔵”にとっては気にする者は皆無である。

総長が番屋の常連でも誰も気にしないのだから、副長が学長の仕事をしていてもおかしくはないのだろう。

三年梅組のプレートがついた教室に入ったメンバーは黒板に書かれたメッセージを見て一瞬止まるもすぐに自分の席に着き、次の授業の準備をする。

だが、唯一長い銀髪を縦ロールにした少女、ネイトは違った。

黒板を見た途端に固まってしまったのだ。

「ミトつつあん、席に着かないと先生に怒られるよ?」

金翼の少女、マルゴツトの言葉すら届いていないネイトだったがすぐさま思考を再起動させ、黒板に書かれたメツセージを消しにかかるが、

「ネイトは俺の嫁。異論は認めない!! by 副長、ロアル・ミトツダイラ」か…ミトツダイラは後で教員室に來なさい」

何時の間にか背後にいた担任のオリオトライに誰もが言わないでくれていたメツセージを読まれてしまう。

「なんで私なんですの!?!」

「こないだロアルに説教したら八つ当たりで給料半分にされたのよ。

ほら、アイツ学長に仕事頼まれてるから教師の給料とかも弄れるみたいでさ…」

「めっちゃ私念だ…」

全員に突っ込まれるが当の本人はこの場にいない。

「とうか、それっていいんですか?」

オリオトライに質問したのは黒髪義眼の少女、浅間だ。

「こないだ酒屋のツケを教導院払いにしたのがバレちゃってさー」

「原因それだよ!!」

全員のツツコミにオリオトライは口笛を吹いて誤魔化す。

「そんなことは置いておいて、授業開始よ」

数人の欠員を出したまま2時間目の授業が始まる。

”多摩”の中央付近にある軽食屋、”青雷亭”<sup>ブルトサンダー</sup>で一人の生徒が表示枠<sup>サインフレーム</sup>を幾つも開いていた。

店内に客はその生徒只一人。店員は銀髪の自動人形が一人。

店主はまだ戻ってきていない。

「じゃあ武蔵さん。さっきの資料を早急にお願ひ。」

『Jud.』<sup>ジャッヂ</sup>、分かりました。五分ほどお待ちください——以上。』

表示枠が一つ閉じ、テーブルにある注文した商品を口に入れる。

ミートパイだ。肉が大量に入った特別仕様だ。

店の扉が開き、人が入ってくる。店主だ。

「あれ、”ローくん”来てたのかい?」

「その呼び方止めてくんない、”善鬼さん”」

「ローくんが副長になってもあたしにとつてはまだまだ子供だからね……  
だから、ローくんなんだよ」

生徒改めロアルの言葉に店主は笑いながら答える。

不機嫌になりながらも追加のミートパイを注文するロアルに店主は微笑みながらミートパイを焼きにかかると。

ロアルは横目で自動人形を見る。

エプロンをつけた長い銀髪の自動人形……

自動人形は感情がない。なのでいつも同じ顔だ。無表情といつてもいい。  
似ていた。

ロアルの記憶にある少女にどことなく似ていた。

だが、別人だ。

何故なら、その少女はロアルの目の前で死んでしまったのだから……

「っ……!!」

その時のことを思い出し拳を握り締め歯噛みする。

ロアルにとつて最初その少女のことはあまりよく思っていなかった。

いつもトリーと馬鹿やって怒られたことは自分でも幼いながらに自業自得だとわかっていた。

だが、あの少女は口を開くと毒舌が飛び出る。昔はよく泣かされた。

そしてネイトと少女の喧嘩になる。

それが、日常茶飯事だった。

だが、それも今から10年前までだった。

彼女が死んだからはロアルの中で心に穴が空いたように虚しさが込み上げていた。

ロアルはその時に理解できた。

彼女のが好きだったと：

LOVEではなくLIKEだ。

今の自分の中にあるネイトへの気持ちとは違う彼女への気持ち。

それは今でも変わっていない。

それと同時に今でも後悔している。

あの時少女を助けられなかった自分に後悔していた。

「ローくん、怖い顔してるよ?」

追加のミートパイを運んできた店主の言葉にロアルは表情をいつもの気怠げな表情に戻す。

「なんでもねえよ」



ミートパイに齧り付きながらそっぽを向くロアル。  
いつもと同じ風景にロアルは目を細める。

ブルーサンダー  
青雷亭で表示枠を操作しているロアルのもとに、通神が入る。

『あ、ロアル。今大丈夫？』

学長だった。

「なんだよ…」

『あれ？怒ってる？』

「わかってて言ってるんだろ？」

「で？要件はなんだ？」

『東の手続き終わってなかったから急いで頼むわ』

「はあ!？」

「アホか!!」

思わず店内で叫んじまったじゃねえか!!

この学長マジでいっぺん殺したいんだが…

『資料はそっちに送つといたから』

通神はそこで終わった。

「切りやがった…あの野郎…!!」

巫山戯んなよ…三河に降りる手続きもあんのに…後で泣かす!!

…絶つつつつ対に後で泣かしてやる…!!

今の作業を一時中断して新たに來た案件…先程の東の一件だ。

こちらを優先させて終わらせる。

急がないとヤバイ!

今日の昼前にはもどってくることになっている。

あくまで予定だからそれより前に戻ってくることも視野に入れておかなければなら  
ない。

10時までには終わらせるとして…残り40分ほど…

邪魔が入らなければ20分で終われるな…

「善鬼さん、パイ3枚追加!」

「まごどー」

昼飯までの繋ぎの分を頼んで作業を開始。

結果だけで言うとうと、ギリギリだった。

東が教導院に着く3秒前に完了して速攻で学長のもとに転送。

「ギリギリだったぜ…」

パイが美味い…

まだ、仕事残ってるんだよなあ…

もう昼前か…

「P-O-I-s、外に水撒いたら上がっていいよ。また夕方からお願いね」

「Jud.」  
ジャッヂ

P-O-I-s、それがあの銀髪の自動人形の名だ。

気がつけば目で追っているが、店の外へ出て行ってしまった。

片手で表示枠を弄り学長の三河での手続きを進めつつ、もう片方の手でパイを口に運ぶ。

口の中に肉汁が広がって、人狼としての本能が打ち震える。

本能といつても「もつと肉くれ！」程度のものだ。

母さんのように純粋な人狼だったら人を食うらしいが、

ネイトは半分は人間だからそうでもない。

俺に関してはそんな気が起こらないだけだ。

俺の体は特殊らしいが、そこに関してはよく知らない。

聖連のトップにいる教皇総長ならば知ってるんだらうけど、”アレ”以来会ってないなあ…

というよりも、武蔵にいる時点で会える確率は殆どない。

取り敢えず、仕事終わったら母さんに連絡しよう。

久々に声聞きたいし、ネイトの近況を知らせろって言われてるし…

「店主様、お客様です。いつものように正純様が、見た感じで申しますと、——餓死寸前で」

取り敢えず飯か…

午前10時。

武蔵の声が武蔵全域に乱立された街灯などに設置された拡声器や大通りに展開されている表示枠から響く。

定刻通りに宣言していた、”ステルス航行”の時間だ。

「10時をお知らせ致します。本艦は只今よりステルス航行に移行します。——以上。」  
武蔵の眼前に武蔵を飲み込む程の大きな鳥居型の表示枠が展開され武蔵を飲み込む。  
航空艦用のステルス術式だ。これにより、今まで地上から見えていた武蔵の巨体が消えた。

否、消えたように見えただけだ。実際に武蔵は変わらずに空を切るように泳いでいるのだから。

武蔵から空を見上げててもそこにはステルス術式によって張り巡らされた代わり映えない白い景色が広がるだけだ。

艦長室ならば少しは違うのだろうか、そうでなければこの景色には面白みがない。

青雷亭には客が一人増えていた。

P-01sによって発見され、店主に頼まれたロアルによって店内に運び込まれた餓死寸前だった本多・正純だ。

ロアルは表示枠に指定された数字を殴り込むように書きながら正純を一瞥するが、構っている余裕はないとばかりに未だに終わっていない教導院の会計業務をこなしていく。

対する正純はそんな視線に気づくはずもなく、店主から差し出されたパンを食べている。

「餓死寸前はヤバイよ正純さん。もうちょつと割の良いバイトしてちゃんと食ったほうがいいと思うんだけどねえ」

「今後は気を配ります。」

店主の心配するような声に正純は申し訳なさそうに答える。

「ウチでよければいつでもお出で。ところで今日はこれから生徒会の仕事かい？」

「ええ。生徒会の副会長として三河の関所まで酒井学長を送りますが、その前に母のお墓参りに行こうかと…」

正純が食べ終わったパンの皿と水の入っていたグラスを片付けつつ聞く店主に正純は先程までの申し訳なさを隠すようにいつもどおりに振舞う。

「よし、終わり。今日の業務終了!!」

店主と正純の会話を断ち切るようにロアルの声が店内に響く。

ロアルにとってはそんな気は微塵もなかったのだが…

「ミトツダイラ!? お前教導院にいるんじゃないや…」

「は?..なんで?..」

突然現れたように感じた正純は狼狽してロアルに疑問をぶつけるが、ロアルは質問の意図を理解していなかった。

学力的にはロアルは学年内でも上位の方だが、それは勉強の効率がいいだけであって

なんでも理解できるといわけではない。

というよりも、ロアルは基本的に一夜漬けで高得点を狙うという無駄な才能を有しているからこそできることであつて、基本的にトリーと同様の馬鹿だ。

ロアルの疑問に正純は答えられなかった。

自分の言ったことが間違っていたのかと、考え込んでしまったからだ。

「ローくん、もう行くのかい?」

「ああ。こつちで出来ることは終わつたから、教導院に戻つて学長の不始末つけてくる」

正純を置いてけぼりにしつつ、ロアルは会計を済まし店を出て、教導院へ向かう。

会計の中に正純が食べたパンの代金が入っていたが、いつものことなのでロアルは別に気にしてもいない。

「正純さん?」

「……………はっ!!」

二人の流れるような動作に口を挟む間すらなく、完全においてけぼりを食らつた正純は呆けるしかなかった。

呆けていた正純に店主が疑問に思つて声をかけると、正純が意識を取り戻す。

話題を中断されたことを思い出した正純は慌てるように店主に言う。

「いつもいつもご馳走になつてすみません。この御恩は必ずいい政治家になつて…」

「いいわよ。もう既にもらってるから…」

店主の発言に正純の時が止まった。

そして、店主が見せつけるようにしてヒラヒラと揺らしている領収書を見る。

それを見てわかった。

いつも、ここでお世話になる時に至ってロアルに会っていたことの意味が：

大抵は正純が世話になってる途中か帰り際のすれ違いなどは会ったが、今回のように最初から居るのはなかった。

今回は本当に偶然なんだろうなあと、考えつつ今までずっと奢られていたという申し訳なさが旨を支配していく。

店主がロアルに奢らせる訳もなく、ロアル自身の判断なのだろうと正純は理解した。

生徒会の業務も偶にだが手伝ってもらってる正純は更に申し訳なくなってきた。

「あの子はお礼として何か送っても受け取ってくれないと思うよ…」

正純が突然椅子から立ち上がるも、店主の言葉に動きを止める。

考えが読まれたのもそうだが、自分の動きすらも読まれていたことに、正純は自分こそ今までわかりやすいのかと頭を抱えそうになるが、今は置いておくことにした。

「理由を聞いてもいいでしょうか…」

「昔からなんだよ。ミトちゃんの弟だから昔はよくミトちゃんみたいになろうとして騎



士みたいに振舞っててね…

その時の名残みたいなもんだよ。」

正純は店主の言葉聞いて考える。

生徒会長である葵・トリーと同じくらいに騒ぎを起こすロアル・ミトツダイラが騎士と同じことをしている…

「……当時を知らないのですが、今だと似合いませんね…」

「そうなんだよねえ。昔は結構可愛かったんだけどねえ。今じゃ、ヤクザ相手にヒヤッハアしてるから騎士というよりは狂戦士だからね…」

再び正純は考える。

所構わず暴れていて味方の被害も考えずに敵を殲滅するロアルの姿だ。

「なんかしつくりきました…」

店主は笑って肯定した。

教導院の廊下でロアルは大きなクシャミをしていた。

手に持っているのは紙の束だ。しかも学長の印が必要な所謂、重要書類という類の束だ。

「うう…誰か噂でもしてんのか…」

ロアルの歩みは緩まず先程から一定の速度で止まることはない。その歩みが止まった。

原因は自分の教室の前で止まっている二人の人物だ。

一人はどこかの物語から出てきたような王様の姿をしている人物。

武蔵アリアダスト教導院教頭兼武蔵王そのひとであるヨシナオだ。

もう一人は教導院の男子制服を着ている幼さが残る顔立ちをした男子生徒、東だ。

「どうしました、教頭？ 後、久しぶり、東」

ロアルが二人に歩みを再開させ近づきつつ声を掛ける。

「<sup>パ</sup>トリーと<sup>カ</sup>一緒に騒いでいる時とは違い、今は学長の代わりに仕事をしている身なので「麻呂」呼びは出来ない。」

「ん？ おお。ロアル君。いや、東君が戻ってきたので教室まで送り届けに来たのだが…」

「ロアル君!!」

ヨシナオの言葉は東の言葉に遮られていたが、そこまで聞いていたロアルは理解した。

「またかよ、あの馬鹿ども…」

自分のことを完全に柵にブチ上げての発言である。

ロアルが3年梅組の教室の扉を開けると…

教卓でストリップパーよろしく脱ぎかけている馬鹿とそれを盛り上げている外道どもがいた。